セナークルの物語

バルザック『幻滅』からフローベール『感情教育』へ

木内尭

はじめに

フランス・ロマン主義文学を語る上で、セナークルの存在は欠かせない。アルスナル図書館を拠点とした「シャルル・ノディエのサロン」、ユゴーを中心に集まったいわゆる「ジョゼフ・ドロルムのセナークル」、ネルヴァルやゴーティエが戯れた「プチ・セナークル」。これらのセナークルが、フランスにおけるロマン主義文学の運動を支えた。ロマン主義者とは社会的に孤立した存在であり、その孤独を好んで謳い上げたが、それと同時に彼らは強い連帯の意識によって結ばれていたのである。他方、同時代の文学作品の中でも、文学や芸術を志す若者たちの集団がしばしば描かれた。そして、それらのグループも時としてセナークルと呼ばれた。セナークルは、文学的な表象の対象でもあったのだ。

本論では、バルザックの『幻滅』（1837-1843）とフローベールの『感情教育』（1869）の二作品を対象に、セナークルと呼ばれる組織がどのように描かれているのかを考察したい。つまり、ロマン主義文学運動の母体になった現実のセナークルではなく、文学作品の中で描かれた虚構のセナークルを、論じてみたいと思うのだ。バルザックは『幻滅』に登場する知識人たちのグループをセナークルと命名している。フローベールは、『感情教育』の決定稿においてはセナークルという言葉を一度も用いていないが、草稿では主人公フレデリックとその親友デローリエを中心とするグループを名指す際に、この語彙を頻繁に使用している。執筆の過程で削除されてしまった言葉は、隠された影響関係を明らかにする重要な手掛かりである。

バルザックの『幻滅』とフローベールの『感情教育』は、多くの類似点を有している。アンドレ・ヴィアルやギィ・サーニュの研究によってすでに明らかにされているように、『感情教育』においてフローベールは、バルザッ

クが『幻滅』で扱った様々な主題を、意識的に書き直している[1]。セナークルもこのような「書き直し」の一環であったのではないか。

そこでまずは、バルザックの『幻滅』で描かれているセナークルの諸特徴を正確に把握することから始めよう。つづいて、『感情教育』において、フローベールがバルザック的なセナークルからどのように逸脱していったのかを検討することにしたい。

1. バルザック『幻滅』

上京してまもないリュシアンはまだ友達もいない。サント=ジュヌヴィエーヴ図書館で研究に励み、安食堂フリコトーで食事をし、そして屋根裏部屋に寝に帰るという生活を送っている。そんな彼はある日、図書館でボナパルトの肖像画を想わせるような高潔な青年ダニエル・ダルテスと知り合いになる。リュシアンはダルテスの気高い理想に瞬く間に魅了され、ダルテスもまたリュシアンのうちに才能の萌芽を認める。やがてリュシアンはダルテスが所属するセナークルに招き入れられることになる。

ダルテスが住むキャトル=ヴァン通りにほとんど毎晩のように集うこのセナークルは、九人のメンバーから構成される。詩人ダルテス、哲学者ルイ・ランベール、医師オラス・ビアンション、政治哲学者レオン・ジロー、画家ジョゼフ・ブリドー、劇作家フュルジャンス・リダル、科学者メーロー、共和主義者ミシェル・クレチアン、そして新入会員であるリュシアンの九人である。彼らの思想は必ずしも一致していない。一例を挙げるならば、ダルテスは王党派であるのに対し、ミシェル・クレチアンは共和派である。しかし、こうした思想の対立にもかかわらず、彼らは固い絆によって結ばれており、

---

[1] André Vial, « Flaubert, émule et disciple émancipé de Balzac : *L'Éducation sentimentale* », dans *Faits et significations*, Nizet, 1973 ; Guy Sagnes, « Tentations balzaciennes dans le manuscrit de *L'Éducation sentimentale* », *L'Année balzacienne*, n° 2, 1981. バルザックとフローベールの関係について論じたものとして、この他にもたとえば次のような論文がある。Alain Raitt, « Le Balzac de Flaubert », *L'Année balzacienne*, n° 12, 1991 ; Gisèle Séginger, « Théorie et critique : Balzac et la poétique flaubertienne du roman », in *Flaubert et la théorie littéraire. En hommage à Claudine Gothot-Mersch*, textes réunis par Tanguy Logé et Marie-France Renard, Bruxelles, Facultés universitaires Saint-Louis, 2005 ; Stéphan Vachon, « Du nouveau sur la rencontre de Flaubert et de Balzac », *Histoires littéraires*, n° 44, 2011.

いかなる諍いも生じたことがないほどであった。リュシアンにとってそこはまさに、パリという砂漠で見つけた「オアシス[2]」であった。

「生きる百科全書」

『幻滅』の第二部『パリにおける田舎の偉人』でバルザックが描くこのグループは、果たして、セナークルという名にふさわしいものなのだろうか[3]。

セナークルとは、元々は宗教的な語彙であった。本来の宗教的な意味においては、セナークルは、キリストと十二人の使徒が最後の晩餐のために集まった部屋、そしてキリストの昇天後に使徒たちが聖餐を執り行うために集まった部屋のことを指した。それが、1829年にサント=ブーヴが「セナークル」と題する詩をユゴーに捧げて以降、ロマン主義者たちの集まりに対しても用いられるようになったのである。しかし、宗教的なものであれ文学的なものであれ、唯一無二の存在に従う信奉者の集団であるという点において変わりはない。キリスト教のセナークルが、キリストという単独の存在を中心とする使徒たちの集会であったのに対して、ロマン主義のセナークルは、天才詩人という単独の存在を囲む崇拝者たちの集まりであった。要するに、天才が神に取って代わっただけであり、信奉者たちの集団であるという点において変化はない。この「単独性」と「集団性」という、一見して矛盾しているようにも見える二つの側面こそが、セナークルの本質的な特徴であると言えるだろう[4]。それでは、バルザックが描くセナークルではどうだろうか。

バルザックのセナークルでは、当初、ルイ・ランベールがリーダーであったが、彼の帰郷以降、ダニエル・ダルテスが代わりにグループの中心的役割を務めている。ルイ・ランベールという人物は、『幻滅』よりも先に発表された『ルイ・ランベール』（1832）で詳らかにされているように、驚異的な知性の持ち主でありながらも、自らの知性そのものに押し潰されるかのようにして、発狂するに至る。『幻滅』では彼の天才ぶりはごく簡単に触れられるだけだが、この不在のメンバーが残りのメンバーたちに対して強い影響を及ぼしていることは、彼の発狂の知らせがもたらされたときのメンバーたちの落胆ぶりからも十分に窺える。バルザックは、「人物再登場法」を効果的

---

[2] Honoré de Balzac, *Illusions perdues*, éd. Roland Chollet, dans *La Comédie humaine*, sous la dir. de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1977, p. 320.

[3] 『幻滅』は、三部構成である。第一部『二人の詩人』が1837年に、第二部『パリにおける田舎の偉人』が1839年に、第三部『発明家の苦悩』が1843年に発表された。なお、第二部『パリにおける田舎の偉人』は1821年のパリを舞台としている。

[4] アラン・ヴァイヤンが編纂した『ロマン主義事典』の「セナークル」の項目を参照。*Dictionnaire du Romantisme*, sous la dir. d'Alain Vaillant CNRS Éditions, 2012, p. 110-111.

に利用することによって、「不在の中心」を見事に作り出していると言えるかもしれない。しかし、リュシアンが加入した時点でグループの核となっているのは、やはりダルテスである。もっとも、この人物は、他のメンバーたちからは新しいリーダーと目されていながらも、特にこれといって強いリーダーシップを発揮することはない。ダルテスがグループのリーダーにふさわしいとすれば、それはその絶対的な寛容さによってである。他のメンバーたち、とりわけミシェル・クレチアンなどは、リュシアンの振る舞いに対して、しばしば情け容赦ない物言いをする。それに対し、ダルテスは寛容である。「リュシアンは虚栄心が強い[5]」と言うミシェル・クレチアンに対して、「彼は詩人なのだ[6]」と述べてリュシアンを擁護してやる。「天使的」という形容詞がまさにこの人物にはふさわしい。後で詳しく見るように、裏切り者リュシアンをダルテスは「天使的」な眼差しでもって許すことになるだろう。「許しが非難を包み込んでしまうようなあの天使的な眼差しをダルテスはリュシアンに投げ掛けた[7]」。

ルイ・ランベールとダルテス以外のメンバーたちも、この二人に勝るとも劣らない才能の持ち主たちである[8]。『幻滅』のセナークルに特徴的なのは、異なる分野の専門家たちが集まっているということだ。ロマン主義のセナークルは、文学者だけでなく画家や音楽家なども出入りしていた点が革新的だったが、バルザックはそれでは物足りないといわんばかりに、文学・政治から科学・医学に至まで、学芸のあらゆる領域の専門家たちを集めている。このセナークルが「生きる百科全書[9]」と形容される所以である。ここでは、一人のリーダーが他のメンバーを教え導くのではなく、皆が互いに知恵を持ち寄る。「学問の異なる領域において皆等しく秀でた同士たちが誠意を持って互いに啓蒙し合う[10]」のである。ジョゼ=ルイ・ディアズの指摘するように、「啓蒙思想の理想への奇妙な回帰[11]」をここに見て取ることも可能だろう。

---

[5] *Illusions perdues*, p. 324.
[6] *Loc. cit.*
[7] *Ibid.*, p. 336.
[8] セナークルの各メンバーについては、さまざまな「モデル探し」がなされてきた。たとえば、レオン・ジローの人物像はピエール・ルルーに着想を得たものであるという。この点に関しては、以下の研究書に詳しい。Osamu Nishio, *La Signification du Cénacle dans "La Comédie humaine" de Balzac*, France Tosho, 1980.
[9] *Illusions perdues*, p. 322.
[10] *Ibid.*, p. 320.
[11] José-Luis Diaz, *Illusions perdues d'Honoré de Balzac*, Gallimard, « foliothèque », 2001, p. 136.

このように、バルザックが『幻滅』で描いたグループは、「単独性」と「集団性」というセナークルの二つの基本的な特徴を、いくつかの点において逸脱している。たしかに、このセナークルにもリーダーは存在するものの、唯一無二の存在ではないし、それは交換可能ですらある。また、メンバーは強い絆で結ばれてはいるが、リーダーの思想に皆が忠実であるわけではない。むしろこのグループを特徴づけているのは、メンバー間の平等であり、思想の違いを越えて彼らが互いに抱いている尊敬の念である。

『幻滅』のセナークルがセナークルの名にふさわしいとすれば、それは新参者であるリュシアンの存在によってである。リュシアンは、セナークルを裏切る。逆説的なことに、このリュシアンの裏切りこそが、バルザックのセナークルをセナークルたらしめていると思われるのだ。リュシアンの裏切りの経緯を次にたどってみよう。しかしそのためにはまず、リュシアンの裏切りの背景となるある二つの二項対立を押さえておかなければならない。

セナークル対ジャーナリズム

『幻滅』は、二項対立の世界である。たとえば、第二部の『パリにおける田舎の偉人』というタイトルが示すように、パリと田舎の対立が作品全体の基本的な運動を支えている。リュシアンの裏切りの背景となるのは、第一に、セナークルとジャーナリズムの対立、第二に、自由派と王党派の対立である。

『幻滅』において、セナークルとジャーナリズムがあらゆる点で対立していることは、誰の目にも明らかであろう。前者は、誇り高い理想を掲げており、その実現のためには進んで清貧に甘んずる。反対に後者は、利潤追求のためには手段を選ばない徹底した功利主義の世界である。また、セナークルが「遅さ」の世界であるのに対し、ジャーナリズムは「速さ」の世界である。理想実現のためには何よりも忍耐が必要であるとセナークルは説く。反対に、ジャーナリズムでは瞬く間に栄光を手に入れることができる。ただし、そこから転落するのも同じように早い。さらに言えば、セナークルは選ばれし者たちによる閉鎖的な集団だが、ジャーナリズムはどこの馬の骨ともわからぬ者たちが集まる開放的な集団である。

セナークルがジャーナリズムに対して抱く嫌悪は並大抵のものではない。「ジャーナリズムは地獄だ。不正と嘘と裏切りがそこでは渦巻いていて、ダンテのようにウェルギリウスの聖なる月桂樹に護られてでもいなければ、そこを通り過ぎることも、そこから汚れなきまま抜け出すこともできない[12]」

[12] *Illusions perdues*, p. 327.

と、セナークルのメンバーはリュシアンに警告する。「地獄」のイメージがジャーナリズムに対してしばしば用いられていることに気を付けたい。ジャーナリズムに身を投ずることとは、「地獄落ち」なのである。この「地獄」のイメージが、ダルテスをはじめとするセナークルのメンバーに対して用いられている「天使」のイメージと対を成していることは、指摘するまでもないだろう。

セナークルとジャーナリズムの対立は、自由派と王党派というもうひとつの対立と交差している。交差しているというのはつまり、セナークルとジャーナリズムの内部にそれぞれ、自由派と王党派が含まれているということだ。セナークルでは、ミシェル・クレチアンやレオン・ジローが自由派であるのに対し、ダニエル・ダルテスは王党派である。ジャーナリズムにも、自由派の新聞と王党派の新聞が存在し、鎬を削っている。自由派と王党派の対立は、政治的なものであるだけではなく、文学的なものでもある。リュシアンにジャーナリズムへのイニシエーションを施すエチエンヌ・ルストーが説明するように、「王党派はロマン主義であり、自由派は古典主義である[13]」のだ。注意しなければならないのは、政治的な意見と文学的な意見が食い違っていることだ。この点についてもルストーは説明を怠らない。「奇妙なことに、ロマン派である王党派は文学上の自由を求め、我々の文学に型にはまった形式を与える諸法則の廃止を要求している。他方、自由派は、三単一の法則、十二音節詩句の詩形、古典的主題を守り抜こうとしている[14]。」

もっとも、セナークルとジャーナリズムのそれぞれに自由派と王党派の両方が含まれているとは言っても、ジャーナリズムではこの対立が食うか食われるかの争いを生み出しているのに対し、セナークルでは思想的対立を越えた友情が成り立っている。このようなところからも、セナークルの団結力の強さが際立つ。

裏切りの物語

セナークル対ジャーナリズムと自由派対王党派という、以上二つの対立を背景にして、裏切りの物語は繰り広げられる。リュシアンはまず、セナークルのメンバーたちの再三の警告を無視して、ジャーナリズムに身を投じる。それだけならまだしも、彼は最初所属していた自由派の新聞を離反して、王党派の新聞に鞍替えする。リュシアンは二度も背反行為を繰り返すのだ。そ

---

[13] *Ibid.*, p. 337.
[14] *Loc. cit.*

の結果として、リュシアンはセナークルに対する最大の裏切りを働かざるを得ない状況に追い込まれる。レオン・ジローが創刊した反政府系の新聞に危惧を抱いた王党派の新聞が、セナークルに対して徹底した攻撃を仕掛けることになり、その最初の標的にダルテスの著作が、そしてその執筆者に転向したばかりのリュシアンが選ばれたのである（ダルテス自身は王党派であったがそのことは知られていなかった）。ジャーナリストになったばかりの頃、リュシアンはセナークルのメンバーに向かって、「ダルテスの著作が出版されたら、僕は彼の役に立つことができるよ[15]」などと、調子のいいことを言っていたが、実際には、リュシアンはダルテスの著作を酷評する記事を書く羽目に陥るのである。さらにはこの記事が原因となって、ミシェル・クレチアンと決闘をすることにまでなってしまう。

この裏切りの物語を描くにあたって、バルザックは宗教的な暗示をちりばめている。そもそも『幻滅』は、聖書へのさまざまな参照や暗示に満ちた小説である[16]。既に見た「天使」や「地獄」のイメージもその一環だ。その他にもたとえば、リュシアンとダルテスの最初の出会いについては、「田舎者の唇に燃え盛る炭火が触れたのであった[17]」と形容されている。この一節は、預言者イザヤが「召命」される場面への暗示である。『イザヤ書』第六章で語られているように、イザヤは神の遣いによって燃え盛る炭火を唇に当てられる。その火によって罪を赦され、預言者としての使命を与えられるのである。バルザックは「燃え盛る炭火」を隠喩として用いることで、ダルテスとリュシアンの出会いを、神による預言者イザヤの「召命」になぞらえて語っている。裏切りの主題をめぐっても、バルザックは聖書を参照している。キリストを裏切るユダとペテロの二人ともが、リュシアンの裏切りに関連して引き合いに出されるのである。王党派に寝返ったリュシアンのことを、自由派の新聞は「小ユダ[18]」と呼んで揶揄する。なぜ「小ユダ」なのかと言えば、実在した王党派のジャーナリストであるアルフォンス・マルタンヴィルが「大ユダ[19]」と呼ばれているからだ。所詮、リュシアンなど、けちな裏切り者に

---

[15] *Ibid.*, p. 473.

[16] 『幻滅』における聖書への言及については、アンヌ=マリ・バロンの論文を参照。Anne-Marie Baron, « L'intertexte biblique d'*Illusions perdues* », in *Illusions perdues. Actes du colloque des 1er et 2 décembre 2003 organisé par l'Université Paris-Sorbonne et la Société des études romantiques*, sous la dir. de José-Luis Diaz et André Guyaux, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, « Colloques de la Sorbonne », 2003.

[17] *Illusions perdues*, p. 314.

[18] *Ibid.*, p. 520.

[19] *Loc. cit.*

過ぎない。セナークルのメンバーは、ペテロの裏切りを引き合いに出して、リュシアンの裏切りを予言してみせる。「鶏が三回鳴く前に、レオン・ジローは微笑みながら言った、この男は「労働」の大義を、「怠惰」の大義とパリの悪徳のために裏切るであろう[20]。」これは有名な「ペテロの否認」への暗示である。最後の晩餐の後で、キリストはペテロに向かって、「鶏が鳴く前に、三度私を知らないと言うだろう」と予言する。レオン・ジローはこのキリストの予言を真似ているのだ。

これらの聖書への言及は、セナークルに対するリュシアンの裏切りとキリストに対するユダあるいはペテロの裏切りとの間に、アナロジーを作り出す。そもそも、セナークルが本来的にはキリストと十二人の使徒が最後の晩餐を催した部屋を指すことを考えれば、『幻滅』におけるセナークルに対するリュシアンの裏切りは、キリストに対するユダあるいはペテロの裏切りに対応している。リュシアンの裏切りを描くにあたって、バルザックは聖書における裏切りの物語を下敷きにしているのではないか。

キリストの予言と同じく、リュシアンの裏切りを予告したレオン・ジローの言葉も的中する。しかし、キリストがペテロを許したように、セナークルもまたリュシアンを許す。リュシアンはダルテスの著作をこき下ろす記事を書くが、涙ながらに事情を打ち明けるリュシアンを前にして、ダルテスはその書評を自らの手で添削してやる。また、決闘で負傷したリュシアンを医師のオラス・ビアンションは献身的に介抱する。さらに、リュシアンの愛人コラリーが亡くなったときには、ミシェル・クレチアンを除くセナークルのメンバー全員がその葬儀に立ち会うのである。しかし、セナークルも結局はリュシアンを悪の誘惑から救うことができない。『幻滅』の結末で、リュシアンは「悪魔との契約」にサインすることになるのだから。

以上のように、本来的な意味でのセナークル、すなわちキリストと十二人の使徒のセナークルが内包している裏切りの主題を、バルザックは『幻滅』において再び取り上げている。聖書においても、『幻滅』においても、セナークルと裏切りの主題は切り離せないものなのである。バルザックが『幻滅』でセナークルを描くにあたって、ロマン主義のセナークルを意識していたことは間違いない。しかし、裏切り者がいるという点において、バルザックのセナークルはむしろ本来的な意味でのセナークルに近いものであると言えるかもしれない。

---

[20] *Ibid.*, p. 326.

それでは、バルザックが『幻滅』で描いたこのようなセナークルと裏切りの物語を、フローベールはどのように受け継ぐのだろうか。次に、『感情教育』を取り上げてみよう。

2. フローベール『感情教育』

フレデリックとその親友デローリエは、夢にまで見た共同生活を開始する。しかし、フレデリックがアルヌー夫人への恋に悶々とし、他の何事にも打ち込む様子のないことに、デローリエは不満を隠しきれない。自分一人の友情だけでは物足りないのだろうと考えたデローリエは、週一回、共通の友人を集めることを思い付く。こうして、フレデリックとデローリエの住むナポレオン河岸通りの家に、毎週土曜日、友人たちが集うことになった。

この集会のメンバーは、フレデリックとデローリエのほか、法学部の学生であるマルチノンとシジー、ボヘミアンのユソネ、画家ペルラン、「市民」とあだ名されるルジャンバール、社会主義者のセネカル、そしてデュサルディエの計九人、つまり『幻滅』のセナークルと同じ人数である。彼らの経済的状況や社会的地位はまったくばらばらだ。たとえば、フレデリック、マルチノン、シジーの三人は裕福な家庭の出身であるが、他のメンバー、特に、デローリエ、セネカル、デュサルディエの三人は経済的に苦しい生活を強いられている。しかし、マルチノン一人を除くと、七月王政に対して反感を抱いているということだけは全員共通している。二月革命へ向けて、このグループでは反体制的な議論が繰り広げられることになる。

セナークルへの憧れ

フレデリックとデローリエを中心とするこのグループの集まりは、単に「土曜日の集会[21]」と呼ばれているだけであって、セナークルという言葉は用いられていない。というか、フローベールは『感情教育』においてこの語彙を一度も使用してはいないのだ。ところが、小説の草稿、より具体的に言えば、筋書きと下書きにおいて、セナークルという言葉は頻繁に用いられている[22]。

---

[21] Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, éd. Pierre-Marc de Biasi, Librairie Générale Française, « Le Livre de Poche classique », 2002, p. 119.

[22] 『感情教育』の草稿でセナークルという語が用いられていることは、ギィ・サーニュの論文においても簡潔に指摘されている（Guy Sagnes, art. cit., p. 57）。ただし、サーニュはこの語が三度使用されていると指摘しているが、実際使用されている回数はそれよりもはるかに多い。

草稿ではこの語彙がどのように用いられているのか、まずは筋書きからいくつかの例を取り上げてみよう[23]。

> 友人たちは週一回＜全員＞集まる。デローリエは結社をつくったり指揮をしたりすることに長けている。プチ・セナークルを設立したのは、彼である[24]。

> 結社をつくったり指揮をしたりすることに長けていたので、彼［デローリエ］はプチ・セナークルを設立する。— それは将来役に立つ。それは土台である[25]。

筋書きの段階では、フレデリックの友人たちの集まりを名指す際に、「プチ・セナークル」という表現が用いられていたことがわかる。また、この「プチ・セナークル」設立に際して、デローリエが主導的な役割を果たしたことも明記されている。次に、下書き草稿からもいくつかの例を取り上げてみることにしよう。

> セナークルの集会が再開する。＜それぞれが自分の席と意見を取り戻した。＞何も変わっていなかった — 彼［フレデリック］は女主人の務めに再びつき、他の人たちをもてなし、お茶を入れるのに対して、デローリエは、肘掛け椅子の肘掛けに長い足を乗せて、暖炉の側でホスト役を務めている[26]。

> 自然と二つのグループに＜セナークルは分裂した＞。デローリエとセネカルがルジャンバールと共に哲学者のグループをつくったのに対し、ペルラン、フレデリックとユソネは芸術家三人組であった[27]。

この二つの下書きでは、フレデリックが女主人であるのに対してデローリエが男主人であることと、哲学グループと芸術グループにセナークルが分裂することが、それぞれ述べられている。女主人対男主人、哲学グループ対芸

---

[23] 『感情教育』の筋書きと下書きはフランス国立図書館に保存されている（分類番号 N.a.fr.17599 ~ N.a.fr.17611）。『感情教育』の草稿について、詳しくは以下の研究書を参照。Kazuhiro Matsuzawa, *Introduction à l'étude critique et génétique des manuscrits de L'Éducation sentimentale de Gustave Flaubert - l'amour, l'argent, la parole*, France Tosho, 1992, 2 vol ; 松澤和宏、『生成論の探究　テクスト・草稿・エクリチュール』、名古屋大学出版会、2003 年. なお、『感情教育』の筋書きはトニー・ウィリアムズによって出版されている（Flaubert, *L'Éducation sentimentale. Les scénarios*, éd. Tony Williams, José Corti, 1992）。

[24] N.a.fr. 17611 f° 68. ＜…＞は加筆を示す。なお、下線はフローベール自身の手による。

[25] N.a.fr. 17611 f° 11.

[26] N.a.fr. 17601 f° 79.

[27] N.a.fr. 17601 f° 88.

術グループという、この二つの二項対立は、決定稿では触れられていない。フローベールが執筆段階では二項対立を軸に登場人物相互の関係を構築していきながらも、決定稿ではそれらの対立をぼかしてしまっていることに、留意しておきたい。

以上のように、『感情教育』の筋書きと下書きにおいて、セナークルという言葉は繰り返し用いられている。この言葉は決定稿では削除されているのだから、フレデリックの友人たちの集まりをセナークルと呼ぶことはできない。しかし、フローベールがこの集まりを描くにあたって、セナークルという文学史的な含みを持つ言葉を意識していたことは間違いのない事実である。ところで、フローベールが意識していたのは、ロマン主義のセナークルだろうか、それとも『幻滅』のセナークルだろうか。まずは、若き日のフローベールがロマン主義のセナークルに対して憧れを抱いていたことを考慮に入れておく必要があるだろう。ジュール・サンドー夫人に宛てた 1860 年 8 月 5 日付けの手紙で、フローベールはコレージュ時代に友人たちと「プチ・セナークル」をつくっていたと述懐している。

> この賞品授与式の季節は、いつも僕にコレージュ時代のことを想い出させる。［中略］僕たちはプチ・セナークルをつくっていて、そこでは誓って言うけど、観察し得る限り最も激しい詩的かつ感傷的な熱狂が、ほとばしり、燃え上がっていたのだ[28]。

マクシム・デュ・カンをはじめとして、文学を志す同年代の青年たちとパリで知り合いになってからも、フローベールのセナークルに対する憧れは変わらない。ルイ・ド・コルムナンに宛てた 1844 年 6 月 7 日付けの手紙を引用しよう。

> 全員が芸術にたずさわる、気のいい青年たちのプチ・セナークルというのは、しかしながら、何と素晴らしいものだろう！　誰か味わい深い詩人を賞味しながら、上質のワインを添えた美味しい料理を食べるため、週二、三回集まり、一緒に生活するのだ。僕はこの夢をしばしば抱いてきた。この夢は他の多くの

[28] Lettre à Mme Jules Sandeau du 5 août 1860 (Flaubert, *Correspondance*, éd. Jean Bruneau et Yvan Leclerc (pour le t. V), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1973-2007, 5 vol., t. III, p. 102).

夢ほど野心的なものではないけれど、それでもおそらく実現することはないのだろうか[29]？

『感情教育』で描かれているフレデリックの友人たちの集まりは、ロマン主義のセナークルに対するフローベール自身のこのような憧れを、ある意味では、具現化したものであると言えるかもしれない。しかし、『感情教育』で友人たちを集めることを提案するのがデローリエであることを考えれば、フローベールが想定していたのは、むしろ『幻滅』のセナークルではないか。なぜなら、デローリエは、バルザックの小説に感化された人物として描かれているからである。

『十三人組物語』のパロディ

「『人間喜劇』のラスティニャックを想い出せよ[30]！」と言って、小説冒頭、フレデリックを叱咤激励するデローリエは、バルザックの小説の野心的な主人公たちを自らの行動の規範にしている。この人物がバルザックの小説に他にも影響を受けている部分があるとすれば、それは結社に対する憧れである。「彼は自らがリーダーを務める結社を設立することを相変わらず熱望していた[31]」。デローリエは、ユソネが保有する新聞を土台に政治新聞の発刊を目論む際（『幻滅』のセナークルのメンバーも新聞を発刊していたことを想い起こそう）、新聞への出資を渋るフレデリックを説得しようとして、バルザックの『十三人組物語』（1833-35）を引き合いに出している。

— コレージュでは、いろいろな誓いをする、結社を設立しよう、バルザックの「十三人組」を真似しようってね！　そして、再会すると、「こんにちは、旧友、じゃあ失敬」って言うのだ[32]。

『十三人組物語』は、帝政期のパリを舞台に、十三人組と呼ばれる秘密結社の暗躍を描いた作品である。十三人組は、『幻滅』のセナークルの前身にあたる組織であると言ってもいいだろう。この秘密組織はフローベールの世代に絶大な影響を及ぼしていた。というのは、当時、十三人組を模倣した組織が現実に存在していたのである。マクシム・デュ・カンは、「イシスの従

---

[29] Lettre à Louis de Cormenin du 7 juin 1844 (*ibid*, t. I, p. 209).
[30] *L'Éducation sentimentale*, p. 65.
[31] *Ibid.*, p. 399.
[32] *Ibid.*, p. 252.

兄弟[33]」と名乗るグループについて、『文学的回想』（1882-1883）で次のように書き記している。

> この頃、つまり 1841 年の終わりか 1842 年の始めに、共通の思想と習慣によって結ばれた、活発で、野心的で、一山当てようと狙っている、私たちよりも少し年上の若者たちのグループと付き合い始めた。彼らは得てして自分たちがバルザックの「十三人組」と同じような組織をつくっているのだと思い込んでいた[34]。

また、ボードレールはレオン・クラデルの『滑稽な殉教者たち』（1862）に寄せた序文で、十三人組のメンバーの一人、フェラギュス二十三世に心酔し、同じような組織をつくろうとした者たちがいたと証言している。

> フェラギュス二十三世に心酔した何人かの哀れな者たちを私は知っていた。彼らは、遊牧民が征服した広大な領土を分かち合うように、現代社会のあらゆる役職と財産を分かち合うため、秘密の同盟を結ぶ計画を大真面目に立てていた[35]。

十三人組を模倣するという発想自体が、もはやありふれたものであったことがわかる。興味深いのは、フローベール自身、『感情教育』の執筆を開始する以前に、『十三人組物語』に着想を得た作品を計画していたことである。ゴンクール兄弟の『日記』で、フローベールが『十三人組物語』をもとにした作品の構想を披露する様子が語られている。1862 年 3 月 29 日の日記である。

> 構想中のこの本から、ずっと前から温めているという他の本に、彼は話を移す。その本は、大長編小説で、人生の一大絵巻であり、ある組織のメンバーが互いに殺し合いをするという筋立てであるという。この組織は、十三人組の結社をもとにしており、その生き残りの最後から二番目である政治家が、最後の生き残りである司法官によってギロチンに送られるのだが、それは善行を行ったためであるという[36]。

---

[33] Maxime Du Camp, *Souvenirs littéraires*, Aubier, 1994, p. 173.

[34] *Loc. cit.*

[35] Charles Baudelaire, « *Les Martyrs ridicules* par Léon Cladel », dans *Œuvres complètes*, éd. Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975-1976, 2 vol., t. II, p. 183-184.

[36] Edmond et Jules de Goncourt, *Journal. Mémoires de la vie littéraire*, éd. Robert Ricatte, Robert Laffont, « Bouquins », 1989, 3 vol., t. I, p. 793-794.

見ての通り、この作品構想は『十三人組物語』のパロディである。バルザックが『十三人組物語』で、たとえ法を侵してでも互いに助け合い、けっして仲間を裏切ることのない男たちの組織を描いていたのに対して、フローベールは、組織のメンバー同士の殺し合いを描こうとしている。しかも最後に生き残るのはたった一人だけだ。このパロディのアイデアがその場限りの思い付きでないことは、このアイデアに対応すると思しき草案が作業手帳に残されていることからわかる。草案のタイトルは、『友の誓い』である。

> 『友の誓い』
> 巨万の富を築く謎の実業家＜商人＞
> ＜二人一組＞ ― 文学者、最初は詩人だったが、ジャーナリストに落ちぶれて、有名になる。
> ― 本物の詩人：ますます洗練され難解になる ＜ ― 具体的＞
> 医者
> 法学者、法律家、公証人。
> ＜二人一組＞ ― 弁護士、検察官になる共和主義者。彼を意気沮喪させる家庭の仕事（エルネスト・シュヴァリエ）
> ― 本物の共和主義者、あらゆるユートピアが次々と（エマニュエル・ヴァッス）
> ＜事務所に雇われ＞ギロチンで生涯を終える[37]

この草案では、七人の登場人物が素描されている。商人、二人の詩人、医者、法学者、そして二人の共和主義者である。まず、フローベールが、本物の詩人と偽物の詩人、本物の共和主義者と偽物の共和主義者を、それぞれ対にしていることに注意したい。『感情教育』の下書きに関連して既に述べたように、このような二項対立は、フローベールの作品の生成過程において散見されるものである。二人の共和主義者に関しては、エルネスト・シュヴァリエとエマニュエル・ヴァッスという、二人の友人の名前をフローベールは書き記している。エルネスト・シュヴァリエはフローベールの幼少時代からの親友であり、フローベールの書簡集のうち、1830 年代に書かれた手紙のほとんどはこの人物に宛てられている。しかし、二人の関係は徐々に疎遠になる。シュヴァリエは、司法官としてのキャリアを順調に歩み、1850 年には結婚して身を固める。シュヴァリエの選んだこのような進路は、フローベールの目には裏切りと映ったようだ[38]。エマニュエル・ヴァッスも、シュヴァリ

---

[37] Flaubert, *Carnets de travail*, éd. Pierre-Marc de Biasi, Balland, 1988, p. 278.

[38] 1850 年 12 月 15 日付けの母親宛の手紙で、フローベールはエルネスト・シュヴァリエに対する憤懣をぶちまけている。Lettre à sa mère du 15 décembre 1850

エほど親密であったわけではないが、フローベールの旧友の一人である。ヴァッスは、1853 年にユゴーの『小ナポレオン』（1852）を頒布した廉で投獄されている[39]。このような二人の経歴と照らし合わせれば、シュヴァリエを偽物の共和主義者に、ヴァッスを本物の共和主義者に、それぞれ見立てたこともとりあえずは納得がいく。

また、このパロディの計画をバルベー=ドールヴィイの小説『デ・トゥーシュの騎士』（1864）と比較してみるのも面白いかもしれない。『デ・トゥーシュの騎士』は、バルザックの『ふくろう党』（1829）と同じく、フランス革命期の王党派の反乱を題材とした作品であり、共和軍に捕縛された騎士デ・トゥーシュを救出するために結成された十二人組の死闘を描いている。この小説がバルザックの『十三人組物語』を意識していることは、十二人組の結成を描いた章が「十二人組物語」と題されていることからも明らかだ。バルベー=ドールヴィイの十二人組は、バルザックの十三人組へのオマージュであると言えるだろう。『デ・トゥーシュの騎士』が最初に新聞に掲載されたのは 1863 年、つまりフローベールがゴンクール兄弟の前で『十三人組物語』のパロディの計画を披露した次の年であるから、フローベールがバルベー=ドールヴィイの小説を読んで、それに対抗するような形でパロディを思い付いたとは考えられない。しかし、ほぼ同じ時期に、『十三人組物語』の正統的な模倣と倒錯的な模倣がそれぞれ生み出されているとは、たとえその一方が草案に過ぎないとは言え、興味深いことではないか。

フローベールの『十三人組物語』のパロディの企画は、結局、未完に終わった。しかし、この草案の名残を、『感情教育』に見出すことができる。なぜなら、この小説においても、同じグループのメンバーであった者同士が反目し合う過程が描かれているからである。

二重の裏切り

フレデリックとデローリエの友人たちの週一回の集まりが開始するのは、1842 年の春のことである。1843 年の夏に「土曜日の集会を締め括るために[40]」ピクニックが催されるまで、彼らの集まりはつづくことになる。デローリエはフレデリックの連れて来たルジャンバールが気に食わないとか、フレデリックはデローリエの連れて来たセネカルをどうしても好きになれないとか、

(*Correspondance*, t. I, p. 719-724).

[39] 1853 年 2 月 23 日付けのルイーズ・コレ宛の手紙に、この事件への言及がある。Lettre à Louise Colet du 23 février 1853 (*ibid*, t. II, p. 248-250).

[40] *L'Éducation sentimentale*, p. 158.

多少の好き嫌いはあるにしても、小説の第一部にあたるこの期間、メンバー同士の関係は平穏なものである。最後のピクニックにも九人のメンバー全員が顔を揃えている。

その後、フレデリックの帰郷により集会は中断するが、1846 年末に彼が遺産を相続してパリに凱旋すると、かつての仲間たちがフレデリックの新居に再び集まる。そのときのメンバーは、マルチノンとルジャンバールを除く、七人である。しかし、フレデリックは友人たちとの間に距離を感じてしまう。「友人たちのことを考えると、真っ暗な深い溝が自分と彼らのあいだにあるのを感じた[41]。」実際、小説の第二部で、フレデリックは友人たちと仲違いを繰り返す。デローリエとユソネとは新聞への出資をめぐって仲違い、ペルランともロザネットの肖像画の支払いをめぐって仲違い、シジーとは決闘騒ぎまで起こす始末、元々険悪であったセネカルとの関係もさらに悪化、マルチノンにもダンブルーズ家のサロンで足を引っ張られる。フレデリックはかつての仲間たちのうち、デュサルディエとルジャンバール（この二人がシジーとの決闘でフレデリック側の立会人を務めることになる）を除く全員を、何かしらの形で敵に回すことになる。そんな中、フレデリックに変わらぬ友情を示し、他の仲間たちとの仲直りを取り計らうのが、デュサルディエである。デュサルディエの尽力により、フレデリックはデローリエ、ユソネ、ペルランの三人とは仲直りをする。また、政治犯として逮捕されていたセネカルが釈放されると、デュサルディエはその祝いを催し、そこにはかつての仲間たちのうち、フレデリック、デローリエ、セネカル、デュサルディエ、ユソネの五人が顔を揃える。デュサルディエは、フレデリックやデローリエ以上にかつての集まりを懐かしみ、そのときに育まれた友情を大事にしようとしているのである。「善良な男は上機嫌で、かつてのナポレオン河岸通りの集まりを想い出すと言った[42]」。

第二部で描かれている仲違いは、そのほとんどが金銭の問題に起因するものであった。ところが、第三部に入ると、仲間同士の諍いが政治的な色合いを帯びたものになる。この第三部では、二月革命後、六月暴動を経て、フランスの政情が次第に反動化していく過程が描かれる。フレデリックとその友人たちも共和制に幻滅し、かつて抱いていた政治的信念を捨て去る。注目すべきは、このような共和制の理念に対する裏切りが、同じグループの仲間であった者に対する裏切りと、重ね合わせて描かれていることだ。ナポレオン

---

[41] *Ibid.*, p. 236.
[42] *Ibid.*, p. 398.

三世がクーデターを決行した翌々日、パリでの生活に疲れ果てて故郷ノジャンに帰るフレデリックは、その道すがら、ルイーズとの再会に最後の望みを抱く。しかし、彼が故郷で目撃するのは、親友デローリエがルイーズと結婚式を挙げている姿である。

> 彼は幻覚を見ているのではないかと思った。いや違う！　たしかに彼女だ、ルイーズだ！ — 赤い髪から踵まで垂れ下がる、白いヴェールに包まれている。たしかに彼だ、デローリエだ！ — 銀色の刺繍の入った青の燕尾服、知事の服装を着ている[43]。

第二共和政の下で地方委員を務めていたデローリエは、クーデターが起こると今度は県知事の職を得る。デローリエはルイーズと結婚することでフレデリックを裏切ると同時に、かつて仲間たちとともに抱いていた政治的な理想に対しても裏切りを働いているのである。この二重の裏切りは、色の描写によって象徴的に示されている。この結婚式の場面には、「赤い髪」「白いヴェール」「青の燕尾服」と、三色旗の色が配色されている。新郎新婦がトリコロールをまとうことよって、政治的な裏切りと友人への裏切りとが重ね合わせられているのである[44]。親友の裏切りを目の当たりにして打ちのめされたフレデリックは、パリにとんぼ返りする。しかしそこで彼は再び裏切りの場面を目撃する。

> ところが、トルトーニの階段に遠くからでも背が高いのでよく目立つ一人の男が — デュサルディエだ — 人像柱のように身動きもせず立ちすくんでいた。
> 三角帽を目深にかぶった、先頭を行進していた警官の一人が、彼を剣で威嚇した。
> すると、相手は一歩前へ出て、叫んだ。
> — 共和国万歳！
> 彼は、腕を十字にして、仰向けに倒れた。

---

[43] *Ibid.*, p. 613.

[44] 『感情教育』において、フローベールは青・白・赤の三色を周到に配置している。たとえば、小説冒頭、共和主義者を名乗るアルヌーの人物描写にも、この三色が見出される。この点について、詳しくは以下の論文を参照。Pierre-Marc de Biasi et Déborah Boltz, « Ajouts, omissions, substitutions : la main fautive des copistes dans le texte de *L'Éducation sentimentale* », *Flaubert. Revue critique et génétique*, n° 1, 2009 [En ligne]. URL : http://flaubert.revues.org/376

恐怖の叫び声が群集の中から上がった。警官は視線でもって周囲に円を描いた。フレデリックは、唖然としたまま、それがセネカルであることを見て取った[45]。

この場面で描かれているのも、やはり二重の裏切りである。最も過激な社会主義者であったセネカルが、クーデター後に警官となり、かつての仲間であるデュサルディエを殺害する。「腕を十字にして」倒れるデュサルディエの姿には、磔刑のイメージが重ね合わせられている。デュサルディエは、共和制の殉教者なのである。

このように、『感情教育』において、裏切りは個人的なものであると同時に政治的なものでもある。この小説で、感情的な出来事と歴史的な文脈が、因果関係によってではなく、「詩的照応」によって結ばれていることは、複数の論者によって強調されてきた[46]。裏切りの主題もまた、物語と歴史のあいだに照応関係をつくりだすものなのである。

フレデリックを中心とするグループを描くにあたって、フローベールが『幻滅』のセナークルと『十三人組物語』の秘密結社を下敷きにしていたことを、今一度、強調しておきたい。強い絆で結ばれたバルザックの結社を、フローベールは裏切りだらけの集団に書き直してしまう。もっとも、裏切りの物語というだけならば、『幻滅』が既に描いていたし、リュシアンの裏切りも自由派から王党派へ乗り換えているという点においては政治的な意味合いを含むものでもあった。『感情教育』の独創性は、仲間同士が裏切り合う過程を、ブルジョワ階級と労働者階級の対立によって第二共和政が崩壊していく歴史的な文脈に重ね合わせることによって、ひとつの時代の精神状態を捉えたという点にある。それこそが、「私の世代の人々の精神史を描きたい[47]」というフローベール自身の言葉の意味するところであろう。

おわりに

本論では、バルザックの『幻滅』とフローベールの『感情教育』の二作品において、セナークルと呼ばれる組織がどのように表象されているのかを、

---

[45] *L'Éducation sentimentale*, p. 614-615.

[46] 『感情教育』における物語と歴史の関係については、特にジャック・プルーストとミシェル・クルゼの論文を参照。Jacques Proust, « Structure et sens de *L'Éducation sentimentale* », *Revue des Sciences humaines*, n° 125, 1967 ; Michel Crouzet, « Passion et politique dans *L'Éducation sentimentale* », in *Flaubert, la femme, la ville*, PUF, 1983.

[47] Lettre à Mlle Leroyer de Chantepie du 6 octobre 1864 (*Correspondance*, t. III, p. 409).

順に検討してきた。その過程で浮上した重要な主題がひとつある。それは、裏切りの主題である。裏切りの主題は、セナークルの文学的な表象において、本質的なものである。なぜなら、この主題は、本来的な意味でのセナークル、つまりキリストと十二人の使徒のセナークルが、内包していたものであるのだから。バルザックは、聖書を参照しながら、誘惑に負けてセナークルを裏切る主人公を描いた。それに対し、フローベールは、友人に対する裏切りと政治的な裏切りを平行して描くことによって、この主題に政治的な射程を持たせた。

本論では、バルザックの『幻滅』とフローベールの『感情教育』の二作品しか取り上げなかったが、セナークルを表象した文学作品は他にも存在する。「ボヘミアンのセナークル」を描いたミュルジェールの『ボヘミアン生活情景』（1851）や、「若き夢想家たちのセナークル[48]」と呼ばれる共和派の秘密結社「ABC の友」が登場するユゴーの『レ・ミゼラブル』（1862）を、この系譜に加えることができるだろう。現在では忘れ去られてしまった作品まで含めれば、この時代、文学や芸術あるいは政治活動を志す若者たちの集団を描いた作品は、相当な数に上るはずだ。これらの作品を丹念にたどることによって、セナークルをめぐるもうひとつの文学史を構築することが可能になるだろう。しかしそのためには、また別の機会が設けられなければならない。

[48] Victor Hugo, *Les Misérables*, éd. Maurice Allem, Gallimard, « Bibliothèques de la Pléiade », 1951, p. 667.